

死者たちについて／とともに出来事の文学を論じること —村上陽子『出来事の残響 原爆文学と沖縄文学』を読む—

浅野 麗

目次

1. 〈読むこと〉の現在
2. 当事者・非当事者のカテゴリーを一人称小説を通して
検討すること — 原爆文学をめぐる —
3. 二項対立を割ることと、相対主義的分析とを区別する
こと — 沖縄文学をめぐる —
4. おわりに

1. 〈読むこと〉の現在

「破壊的な出来事の底」に埋もれる存在の「うめき声や泣き声、叫び、骨がこすれ合って生じるかすかな音」を「響き」として受けとめる。そしてそれを、「語ることでできない存在」が「いまもなお生き延びている」ことの証言とする。本書は、これを「出来事の残響」とし、大田洋子、林京子、井上光晴、長堂英吉、目取真俊などの作品を丹念に、そしてまっとうに読むことを試みる。その丹念さは、被ばく体験、沖縄戦の体験について、作家が自覚的に再現しようという明確な意図を持ったわけではないところの「沈黙や不可解さ」に注目し、書く主体が「出来事に会い直し、言葉を紡いでいく過程で直面せざるを得なかった、語り尽くすことのできない」ことをひもとく丁寧さにつながる。そのように「読むこと」は、私たちが「生きること」そのものだとは氏は述べる。もちろん本書は、これに終始しない。村上氏の文は、浮かび上がる「出来事」そのものに共振し、「痛みの分有」を実践するように「読むこと」の意味を伝えるだろう。

「破壊的な出来事」によって生まれた「死者」のことばを、いかに聞き、読みとることができるか。本書の通奏低音として響くこの問いは、2011年3月11日以降に繰り返して生起してもおり、「いま・ここにある 死者たちとともに」という帯文からわかるように、本書ではこの問いへの真摯な応答が展開されているとも言える。いや、この応答のためにこそ、〈沖縄文学〉も〈原爆文学〉も、いま、読み直されていると言っても過言ではない。ここで私は、「東日本大震災」による「死者」を

めぐる、文芸評論家の若松英輔氏の言葉を思い出す。「出来事」が生み出した「死者」と、その者に出会い直そうとした作家（あるいは作品）の言葉を読むことに関する村上氏の文と、それは同期するように思えたのだ。若松氏の言葉を引こう（引用は、「協同する不可視な「隣人」—大震災と「生ける死者」—（『魂にふれる—大震災と、生きている死者—』2015.03.15、トランスビュー／初出『みすず』2011年9月号、みすず書房による）。それはいささか、問題含みともいえるものだ。

若松氏は、死者の体験が「他者によって共有され、現実の出来事となる」ことを求める者として、死者を語る生者について述べる。この生者は死者の「呼びかけ」に応答することで死者と「共に今を生きる」者であり、その言葉を「読むこと」が、出来事のあとに求められる。このとき重要なのは「憐れみをもったまなざしで、話す人を見」ないこと。憐憫、あるいは危険な感傷を抑える批評性を失わず、「共感や理解を前提としない」「協同の関係」において、死者と生者が互いに「存在の奥から何かを呼び覚ま」し、生者は癒されない「孤独」に耐え、読むことが提唱される。これは、村上氏が述べる、「読むこと」と同じである。おそらく異なるのは、言葉を読む「孤独」云々、というようなところで、それは若松氏が憐憫や感傷を抑制することに自覚的であっても、死者の言葉に向き合う「孤独」において今を生きる、という修養のスタンスでその言葉を受け止めるということだろう。おそらく述べたのは、どこかでこのように「読むこと」との近さが村上氏にあるという感触を、私は拭えないためである。

ところで、このように読むこと、あるいは読む主体はどのような者になるのだろうか。例えば、青来有一氏は、若松氏と近いニュアンスで読むことを捉え、村上氏の本の刊行とほぼ同時期の『文学界』2015年9月号に発表したエッセイ「原爆と文学のあいだで—原民喜、大田洋子、林京子再読のすすめ」において、具体的に「被爆作家」の小説を読むことを次のように述べる。

戦後文学は「敗戦の苦さも、せつなさも噛みしめて噛みしめてただひらすら噛みしめてきた」であり、「戦争や原爆に関する小説を読むこと」は「その悲惨と屈辱を噛みしめること」である。「原民喜や大田洋子、林京子の書物を忘れ去ってしまえば、七十年という戦後の時間のなかで噛みしめ味わってきた敗戦のうまみとそこからにじみでる滋養を失ってしまう」ことになる。「うまみ」や「滋養」とは、「わたしたち」が知った「放射線の底知れない不安や、得体のしれない恐怖」を再現した言葉が持つ。「被爆作家」の言葉は、「根がゆるんでぐらぐらとしはじめた歯のようにゆれつづける人間の生の真実と不安な未来を見極め」ているがために「滋養」なのであり、それは「わたしたち」が出来事の忘却に抗うためにも不可欠である。主旨の重要さは疑い得ないものの、他方で、痛みを「ただひたすら噛みしめ」るように読むことの提唱は、きわめてドメスティックなやり方での記憶の継承にもつながる。害を被り、戦に「敗」れた立場で読むことは、言うまでもなく帝国の侵略戦争および植民地主義の起源を忘却することにつながる。にも拘わらず、氏の言葉は、「いま・ここにある 死者たちとともに」(村上氏) 生きることにおける、読むことの重要さを述べるものである。

もちろん、修養のスタンスを維持して、さらに歴史的に自閉してしまうことを目的とするわけではなく、むしろそのことに抗うように各論が示される本書なのだが、他方で「出来事の残響」の捉え方が若松氏や青来氏とそれほど遠くない。例えば本書では、「自分のものではない痛みを受け取ることの重要性をくりかえし指摘する」ことが強調され、その感受において「残響に共振」すること、「出来事を生き直す契機」があるという前提で「文学の言葉」を読むと宣言されているからだ。「出来事を生き直す」と述べることは、私にとっては慎重に遂行されねばならぬことに思える。というのは、読むことは、村上氏の述べる生き直しに活用され得ないような違和が、私に突きつけられることだと思っているからだ。

本書において「文学の言葉」は、「歴史学や社会学などの実証的研究からはこぼれ落ちてしまいがちな、語られない記憶や痛み」を内包するものとされる。それを読むことと、言葉を孤独に噛みし

めることとの差はどのように見出せるか。若松氏における「死者」とは、村上氏が述べる「抑圧されてきたために証言を遺すことがかなわなかった存在」と置換可能であり、また、青来氏における「被爆作家」も、「死者」が「文学の言葉の細部に声なき声を響かせている」ことに自覚的であった者だ。ここで次のことに留意しよう。村上氏は「文学作品」においてこそ、「出来事はより重層的な文脈に開かれ」と述べ、そこに「記憶や体験が受け渡されるきわめて小さな、しかし複数の回路」を見つけ、そこに「国家の原理や大きな物語に回収されることへの抵抗」があるという。ここに、「読むこと」における、若松、青来氏との違いが見出せるはずだ。本書が採用する「痛みの分有」、「共振」という読みの方法において、感傷と切り離され、また、痛みを示す言葉を「噛みしめる」という自閉から遠ざかる批評性が、どのように発揮されるのかを確かめたい。それはジョルジュ・デディ＝ユベルマンが述べる「理論的厳密さ」を測ることにともなる。ユベルマンは次のように述べる。プリーモ・レーヴィが収容所の証言の「伝達不可能性」をめぐる様々な思索を批判したように、「証言が存在し、それが可能だったということ自体—そのすべてに抗しての表明—が語りえぬアウシュビッツという、美しくも閉ざされた概念を反駁」するなら、「証言がわれわれをいざない、われわれに課しているのは、ことばの間隙自体のうちでの仕事に取り組むこと」である。「苦役のなかでの死を、それが前提とする声にならない叫びや沈黙も含めて、記述すること」には、「あらゆる理論的厳密さ」が求められる。「痛み」を伝えようとする直接的な「言葉がしくじりかけたかに思われるところに現れ」る「イメージ」、あるいは、出来事をめぐる「想像がしくじりかけたかに思われるところに現れる」「言葉」を「厳密」に復元すること。この「しくじり」の復元と、「出来事の残響」の可視化は通底するのか。

最初に、本書の〈原爆文学〉をめぐる論考、とりわけ、「出来事」の当事者性／非当事者性という線引きを越えて、出来事によって生じた「痛み」を分有する可能性を、一人称小説を対象に検討する論考をみる。紙幅の都合上、すべてを詳述することはできない。本稿では、代表的な論考を選び、

それを検証する方法で進める。まず、大田洋子論である。

2. 当事者・非当事者のカテゴリーを一人称小説を通して検討すること—原爆文学をめぐる—

かつて川口隆行氏は、「怒れる大田洋子」について次のように述べた。彼女は、原爆投下国アメリカに対する激しい憎悪を喚起すると同時に、「被爆者を差別する非被爆者の視線を徹底的に抉りだし、被爆者と非被爆者の国民的和解を演出するように「黒い雨」と「夏の花」を国語教科書に採用していった力学とは反対に、「庶民」＝「日本人」という表象に「被爆者／非被爆者という分割線を鋭く挿入」(『原爆文学という問題領域 増補版』(創言社、2011.05、32 頁)。そのエクリチュールは「激しい呪詛に彩られ」、「原爆乙女」という紋切型の記憶に押し隠された暴力の起源」を思い出させることで「他者に記憶の分有を執拗に迫り、さらに「被爆者」という主体形成を志向」しながら、バトラーの言う「主体形成のパフォーマティブな効果によって、「被爆者」という主体の虚構性、不完全性をおのずから暴く(同書 33 頁)。川口氏が明示したのは、「黒い雨」と「夏の花」を同時に受容しつつ、大田洋子(と、そのエクリチュール)を周縁化したポリティクスである。それは、被害者としての被爆者像を媒介とした「ナショナリズム」の形成と〈原爆文学史〉とが結託した事態を指す。『出来事の残響』の一章は、この枠組を逸脱することなく、中央文壇がいかに大田を周縁化したかを明らかにしつつ、作品をいま読み直す妥当性を示す。

では、「第二章 原爆を見る眼—大田洋子「ほたる」—『H市歴訪』のうち」をみよう。原民喜の「鎮魂歌」を想起する視点人物の「私」と、「鎮魂歌」の「僕」の「語り」との違いをもとに分析が進む。死者の声を聞く「僕」を媒介に「無数の嘆き」を「増幅」する「鎮魂歌」に対し、生者を徹底して「見る」「私」を立ち上げる「ほたる」—『H市来訪』のうち(以下、「ほたる」と略記)。「鎮魂歌」の語りと、「見る」ことを徹底する「私」の表象を対比的に捉えること、つまり語りと表象とを対比させるところに私は混乱したのだが、この混乱はいまは措いて、論に立ち入ってみよう。

まず村上氏は、原民喜の詩が刻まれた石門と人間の肌を類比的に捉える「私」の、「死者」の「呼び起こし」方の特異性を析出し、「死者」の言葉を「増幅」する「鎮魂歌」の語りと「ほたる」における「私」の語りとの差異を見出す。

[…]「無数の嘆き」から係累を引き寄せようとする「私」の語りは、個別の死者の嘆きを「無数の嘆き」に増幅させ、死者の側に身を投じていった「鎮魂歌」の「僕」の語りとは異なるものである。「鎮魂歌」の「僕」の語りは死者への共振であり、「向側」と「こちら側」の境界で築かれる死者と「僕」との応答関係を築いていた。だが、あくまでも生き残った者の側に立ちつづける「私」の言葉は死者に到達することなく宙吊りになってしまう。(43 頁から 46 頁)

「鎮魂歌」の「僕」の語りは「死者への共振」で、それは「死者」との「応答関係」を指し示すという前提で話が進む。ところで、「鎮魂歌」の「僕」の語りについては、彼我の境界の絶対性を踏まえ、「死者」との応答も含めた「関係」構築の不可能性において、それでもなお「死者」に「共振」するダイナミズムが、中村三春氏などの先行研究によって評価されたところだ。だからまず、「共振」に「応答関係」をみることそのものに説明が要る。「死者」と「僕」とを媒介する語り、すなわち、「境界」を行為遂行的に拡張して「死者」との隔たりを際立たせてしまう語りを検討する先行論を踏まえ、では、「共振」にはいかなる「応答関係」が潜むのかを説明する必要がある、ということだ。だが、本書ではこれが省略される。おそらくそれは、死者と生者との双方向的な言葉の応酬に「鎮魂歌」の特徴があり、「ほたる」には生者から死者への一方向的な言葉の投げかけがあるという図式を鮮明にすることを急いだからだろう。続いてこの図式をもとに、「私」の語り、まなざしに、重度の「被爆者」と「共振」する可能性をみてゆく分析が展開する。みてみよう。「私」が蛍の光となめくじの軌跡を目にし、そこに兵隊の姿を重ねる場面を分析するところである。「私」がまず、蛍をみて「あんたたちが死んでから、間もなく戦争は

すんだのよ。もう兵隊さんじゃないんだからね、とびなさい。高くとびなさい」と発話し、蛍のみならずなめくじも「兵隊の亡霊」と見て、さらに「あんたもとの兵隊さんでしょう。なにか云いたくて、まい晩きているの。死にきれないの」と発話する場面の分析である。

かつての練兵場に息づくこれらの生き物たちは、「鎮魂歌」を原民喜の言葉として読んだ「私」の眼を介して、存在自体を消されてしまった死者として見出されている。「私」は[…]、生者の側から喪われた死者の声を代弁することの限界にもぶつかって (①) おり、言葉は誰に届くともなく「私」の「実感」としてそこに留まることになる。／喪われた者への／からの言葉をたぐり寄せ、喪われた者との間に回路を開くテキストが鎮魂歌であったとするならば、この場面での「私」は、その手法を不器用に真似しつつそれに挫折 (②) している。だが、それは原民喜と彼の死／詩に動かされ、応答しようとした大田洋子の身振り (③) として捉えることができるだろう。しかし太田自身の特質は、死者の言葉を聞き取ることにではなく、生き残った人を徹底して見つめる行為 (④) にあった。被害者の無残な傷やケロイド、貧困に対して向けられた彼女のまなざしは執拗で、ときに残酷ですらあったのだ。(本書第二章、45 頁～46 頁)

「私」の呼びかけが一方向的で「宙吊り」になっているのは事実だろう。しかしそれが、波線部①のように、「死者の声を代弁することの限界」にぶつかるもの、死者にどう応答するのかという倫理的要請を持つものだと述べることの根拠は不明だ。「喪われた者」「からの言葉をたぐり寄せ」ようとする試みが、「ほたる」の「私」の企図として、小説内でコンスタティブに示されるわけではない。だから、波線部④にある「大田自身の特質」(「ほたる」という一人称小説の「私」でなく?) への問いを、いわゆる〈代理表象〉の問題系で捉えようとするには説明が要るのである。この説明を略すから、波線部②のように「鎮魂歌」の語りの境地に達しない「私」の「挫折」を指摘するこ

とも、対比を鮮明にするための印象操作にみえてしまう。「私」がなめくじや蛍に兵隊を幻視する「まなざし」を持ち、幻視された兵隊に語りかけることはたしかに読める。だが、その想像力のもとに「死者の声を代弁する」代理表象の問題(と倫理的な意識)が潜むとみることには、慎重さが必要だろう。それが潜むのかどうか、そのこと自体が、小説の評価に関わってくることだからだ。というのは、「見る者」である「私」のまなざしが「アメリカ」のそれと異なること、ゆえに見る者の特権を「私」において解除する語りが「ほたる」にはあるということを、村上氏は主張するからである(本書 47 頁～49 頁)。その結論部は、以下、①～③(本書 49 頁から 53 頁)のように要約されるものである。①「私」の「まなざし」は、被爆者の木川の「肌」が「治癒を拒み、さらなる傷と痛みをその身体に呼び込んでしまう」装置となっており、そのまなざしを持つ「私」は、②光子の「まなざし」にさらされつつ「うちの眼、光っているでしょ」と話しかけられ、光子との「相互に見つめ合う関係」に置かれ、その関係を介して③「光子のまなざし」と「木川の腹のケロイドに被爆者が生きてきた戦後の時間と痛みを看取する「私」とが「重なり合う」。この重なり合いが「見る」私の特権性の解除ゆえに生起するものであること、そしてこのように重なり合う、他者の「痛みの分有」を可能にする「私」が表象されること。これが結論である。ここに説得力が生じるのは、そもそも小説において代理表象の問題が争点になると共有される場合だ。すでに検証したような問題を含んでいるとすれば、その指摘の妥当性も含めて、氏の述べる「痛みの分有」の質そのものが問われ直されるべきかもしれない。

このように読みすすめてみると、「痛みの分有」の生起する磁場、読み手を巻き込まずには措かない「共振」、響き合い、重なり合い、重層性、複数性といった術語で析出されること、つまりテキストの特異性をめぐる考察には、いくつか留保が必要になってくる。

「第七章 せめぎ合う語りの場—林京子「祭りの場」をみよう。これは、他者の言葉と「私」の八月九日の体験との「結びつき」がつくる「せめぎ合い」を論証しようとするものだ。「祭りの場」

が、いかに「体験を特権化せず、記録の引用によって出来事の全体を描くことを試み」ているのかを明らかにしようとする。それは、「原爆を多様な視点で捉える」という 2000 年代以降の作品評価に収まるものではないという前提で進められるものだ。村上氏は、多様性を評価の根拠にすることの限界に自覚的であり、その上で「複数の視点や複数の声が絡み合い、重層化する構造」を捉えようとする。

まず村上氏は、原爆投下の当事者（加害者）である「アメリカ」（テキストで「〈神の御子〉」にあるとされる側）と、もう一方の当事者（被害者）である「私たち」のどちらにも組み込まれない長崎の「アメリカ人捕虜」を、小説が記述するところに注目する（155 頁）。小説は「〈神の御子〉＝アメリカ人：「私たち」＝日本人被爆者」という二項対立におさまらない「〈私たち〉」を成す。「アメリカ人捕虜の中にも、キリスト教徒はいただろう。しかし、彼らは決して〈神の御子〉とは名指されない。ひとくくりにできない多様な〈私たち〉が九日の長崎にいた」（155 頁）。このことを示す小説の可能性が問われる。どのような可能性か。結論部分で、「多様な〈私たち〉」は「極限状況」を生きた「私たち」とされている。この「私たち」は、極限状況からの生還を「意味あるもの」、すなわち、被害の根拠として語れない者の集まり、その物語に統御されない浮遊した個の集まりである（156 頁～157 頁）。アンデスの飛行機事故で遭難し、人の肉を食べたサバイバーの極限状況を、出来事の前後で様変わりする事態の例とする小説は、身近な者にも敬遠され、「被曝」以前の「生が取り戻しようのないかたちで損なわれた」「私」のこともサバイバーとして定位してゆく。「私」は、アンデスの飛行機事故で遭難した人もそうであるように生を「意味あるもの」とできない者となった、そして生の有限性を知らされて虚無を生きる。これは八月九日の「出来事」によって生み出された「無数の死者」の体験に届き得ぬ者、すなわち、出来事をいかにも物語化しえずに「生き延びた人々」と同様である。被害者の物語に回収されない「無数の〈私たち〉」をこのように描く小説の、「私」の語り」の重層性がポジティブに析出される。

〈私たち〉は、被曝前の「明日もあさっても生きるつもりでいた」未来への信頼を断ち切れ、病や傷、恐怖や痛みによって極限状況につながとめられている。〈私たち〉は、逃げる途中に聞いた重傷者のうめき声にとらわれ、傷の再発を恐れ、体内に残ったガラス片に肉を刺されるという痛みを感じて生きている。
／「私」の語りに挟まれる無数の痛みは、ひとりひとりが極限状況を生きつづけていることの証左にほかならない。戦後を極限状況として生きている複数の〈私たち〉の声が、「私」の語りを重層化するのである。（本書第七章、156 頁～157 頁）

さて、「無数の痛み」、「複数の〈私たち〉の声」を埋め込んだ「私の語り」の重層性を導く結論は、「祭りの場」を、声の多様性に満ちた小説と捉える先行論の評価とどう異なるのだろうか。別に、異ならなくてもよいけれども問題は残る。誰もが被害者としての「被曝者」として一体化できない、なぜなら「私」も除かず、その「ひとりひとり」には「極限状況を生き続けている」という傷が刻まれつづけているからだ、というのは、いわば当然のことで、むしろ争点は引用傍線部にあるように、「私」の語りに挟まれる」という痛みの「挟まれ」方だ。だが、氏の結論は「ひとりひとり」の「声」によって「私」の語り」が重層化されることの指摘に留まる。この指摘に留まれば、逆に重層的であるという特徴を持つ「私」の語り」が、そのような声を内包して揺らぐのだとしても、それも含めて語りうる「私」という主体の安定性は揺るがないだろう。では小説は、その語りを、原爆投下の被害者であることに依拠する、「私」自らへの主体化批判として明示しようとしているのだろうか。ならば、「被害者」として一体化し得た、戦後の「国民」国家形成にどう関わる語りとして、それは捉えられるのか、といった問いも浮かぶ。このような考察を開くには、「私」の語りの重層性とはどのようなものなのか、そのダイナミズムを、さらに言葉にする必要がないか。例えば、「祭りの場」には、視点人物兼語り手の「私」が知りえない情報を、事実確定的に示す語りもある。この情

報提示の仕方、すなわち、「私」がどこでいつ聞いたのか判然としないような言葉、小説のもっとも外郭に置かれた言葉にも構成される、その語りの構造にも目配りが必要だろう。そこで初めてテキストの重層性がもたらす意味もみえてくる。複数の言葉のせめぎ合い、響き合いの痕跡とされる「残響」を指摘する、というまとめ方が本書では頻出する。もちろんそれは、既述したように「抵抗」の回路を開くということにつながるものなのだろう。どのように？ この回路を開くための読みを検証する観点から、以下、〈沖縄文学〉をめぐる論考のいくつかを取り上げたい。

3. 二項対立を割ることと、相対主義的分析とを区別すること—沖縄文学をめぐる—

「第十章 亡霊は誰にたたるか—又吉栄喜「ギンネム屋敷」論を取り上げよう。「亡霊」がキーワードである。戦争、戦後体験をめぐる民族、ジェンダーの違いを構造化し、政治的葛藤に満ちる「ギンネム屋敷」。その末部、「朝鮮人」から遺産贈与を受けた「沖縄人」の「私」をめぐる象徴性を軸とした検討を、村上氏は以下のように行う。

「朝鮮人」が〈小莉^{シャーリー}〉という声なき死者の沈黙を恣意的に意味づけていったように、「朝鮮人」の語りを聞き取った唯一の生者である「私」は、「朝鮮人」の言葉と自分の記憶をすり合わせ、つじつまの合う仮説を編成しようとする。

「朝鮮人」の語りの中ですでに同定できない存在として曖昧に揺らいでいた〈小莉〉とその死は、「私」の仮説に至っては「幻」とされ、存在を根底からかき消そうとする語りの暴力にさらされる。「私」が〈小莉〉の存在を不確かなものとして読みかえていくことは、すなわち亡霊の回路を塞ぐことである。しかし〈小莉〉が「幻」だとすれば、彼女に駆け寄ろうとした「朝鮮人」が日本兵に殴り倒される事態は起こりようがなく、「私」は「朝鮮人」から遺産を贈られる唯一の理由となる記憶も手放さなければならなくなる。「私」は自分が相続した屋敷に埋められた〈小莉〉の存在を「幻」だと位置づけて彼女の亡霊から解放されたいという思いと、自分が信じたい「事実」が決

して折り合わないことに直面させられる。このとき、「私」を戦時中の記憶に引き戻し、絶えず不安をかきたてる「朝鮮人」は、すでに「私」に取り憑くもう一人の亡霊となっている。（本書第十章、222頁～224頁）

「沖縄人」の「私」における、「朝鮮人軍夫」からの「遺産相続」をめぐる分析である。引用にあるように、この「遺産相続」は、「朝鮮人慰安婦」の「沈黙を恣意的に意味づけ」る「朝鮮人軍夫」と同様、「沖縄人」の「私」が「朝鮮人慰安婦」を沈黙させる「語りの暴力」を発動すること、その「存在を不確かなもの」とすることの継承として読まれている。そして「私」が、相続した「幽霊屋敷を売ろう」とし、「亡霊にまつわる記憶の隠蔽」を行おうとする問題点（224頁）が、「植民地主義体制」において繰り返される「レイプの構造」に拠るものだと指摘され、その上でしかし、「私」は「また別の亡霊を呼び覚ます場となる可能性」に開かれているという。ここで「亡霊」とは、遺産、屋敷を相続すると同時に引き継がれる、「朝鮮人軍夫」や、彼が抑圧した「朝鮮人慰安婦」の語られない記憶と同義である。また、それが「亡霊」と表現されるのは、語る意図をもって語られるわけではないが、それを図らずも引き継がなければならぬ状況に巻き込まれる者に、その記憶が継承される構図がある、という前提があるからである。

「朝鮮人」の遺産を用いて「私」が着手しようとする仕事は、持続する植民地主義体制の中でくりかえされるレイプの構造の一部を担ってしまう。遺産は女性たちの手に入ることにはないままに分配され、消費され、流通していく。またしても女性たちの身体を商品とし、激戦地に赴くことを余儀なくされている米兵に差し出すために用いられようとしている。そのような痛みを生む経済の構造を再生産させるものこそ、米軍という軍事組織である。「ギンネム屋敷」において「朝鮮人」の遺産は、沖縄に生きる人々に対する米軍のプレゼンスを顕在化させる機能を果たしていると言えるだろう。／「朝鮮人」の遺産が使い果たされていく過程において、その遺産に刻印さ

れていた「朝鮮人」や〈小莉〉たちの「生きられた記憶」もまた、断片化され、消費されていくことになるのかもしれない。しかしおそらく、贈与の理由の不可解さは「私」に取り憑き続けるだろう。そして、資本として流通する屋敷が、思いもかけないかたちでまた別の亡霊を呼び覚ます場となる可能性も失われていない。(本書第十章、224 頁)

米軍占領下の沖縄は、「レイプの構造」を持つのだが、その構造から逃れられないことを示唆するように、「記憶の隠蔽」を継承する「沖縄人」の「私」が表象される。この「私」を産出してしまうことと同時に、占領体制下の性産業に絡め取られる「女性たち」もまた産出され続ける。まず問題は、「朝鮮人軍夫」から「沖縄人」の「私」に、「朝鮮人慰安婦」の女性を抑圧するありようが継承されることである。このとき、村上氏は、「痛みを生む経済の構造を再生産させるものこそ、米軍という軍事組織」だとする視点を設定するのだが、ここで議論がスライドすることがわかる。するとどうなるか。「朝鮮人軍夫」も「沖縄人」の「私」も、彼らに抑圧された「朝鮮人慰安婦」も、この「レイプの構造」の被害者だということになるだろう。つまり、その構造の被害者を描き出す視点において、むしろ「植民地体制」のジェンダーによる、あるいは、それゆえにレイプの加害者／被害者となるという差異を消した図が浮かび上がってしまうということだ。「植民地体制」と、その「レイプの構造」を問題化することの重要性はわかるものの、その構造に傷つく者を無媒介的に結びつけてしまうことで、「記憶の隠蔽」を行う・行った者の当事者性が検討の対象から外されると同時に、誰が、どのようにもっとも〈痛む〉のかを特定しない記述が成立してしまうように思われるのだ。このことの問題は、これに留まらない。「朝鮮人」の遺産をめぐる、沖縄に生きる人々に対する米軍のプレゼンスを顕在化させる機能が小説に見出せるとすると、「ギンネム屋敷」は「米軍」による「沖縄人」、あるいは「沖縄人」と「朝鮮人」の「分断」によって斬り刻まれた、「沖縄」の極限状況を際立たせるように「朝鮮人慰安婦」の「沈黙」を“活用”した小説になっているとも言えてしまう。「沖

縄人」の「私」の可能性を、引用末部のように村上氏がみることとは逆に、「沖縄人」が相続した「屋敷」を売り払おうとしていることは、「思いもかけないかたちでまた別の亡霊を呼び覚ます」というより、むしろ、「沖縄人」の「私」が暴力の痕跡をみなくてすむ者として主体化する可能性を排除しない。「亡霊」とは「朝鮮人軍夫」である。この「亡霊」によってさらに「沈黙」を強いられ、「私」にも「幻」と思われる「朝鮮人慰安婦」が「隠蔽」される。この隠蔽に加担するからこそ「沖縄人」の「私」は「亡霊の回路を塞ぐ」者だが、そのように関係させられることの受動性に着目した上での一般論に転じることは、「塞ぐ」ことの意味を奪うことになるだろう。このことは、抑圧の記憶を隠蔽して「米軍のプレゼンス」を前に、一枚岩の抵抗主体を作り出すことにつながらないか。「亡霊の回路が開かれる瞬間に向けて、「ギンネム屋敷」の亡霊たちは跳梁」するという可能性(226 頁)を指摘する言葉それ自体が、私には、「朝鮮人慰安婦」を二重に隠蔽する構造に加担しそうにもみえるのだ。

ここで検討したことは、実は、本書の第五章『カクテル・パーティ』論で感じたことも踏まえている。その結論部でも、中国、アメリカ、日本、沖縄をそれぞれ代表する、男性の「レイプ的暴力」が問題とされている。この際にも、「暴力」を遂行する者を作り出す構造批判が迫り上がっている。そのことを問題化することは当然必要である。とりわけ「レイプ」をはたらかざるを得なかった占領者(アメリカ人男性)を小説が描いたことについて、村上氏は、マイク・モラスキー氏の議論を踏まえ、占領者として沖縄の、中国の、日本の人びとと出会うしかなかった者のヴァルネラビリティに配慮し、ゆえに加害者にならざるを得なかった、と図式化している。そして、構造」の被害者でもある占領者、という主体の重層性を見出す視点は、そのように主体を重層的に描き出すことにおいて、小説が占領体制批判を遂行したものとする。だが、なりたくて占領者になったわけではないというところに遡り、「レイプ」の加害者を解釈することは、レイプ加害者を救済するご都合主義の見解にもつながる。ここに「ギンネム屋敷」論の限界と似たものがあるだろう。構造がうむ被害者として加害者を意味づけ直すことが、出来事

の重層性を説明するとき、そしてその構造をみるタイミングを結論に置くとき、そこには、出来事的具体像から遠ざかる相対主義的な視点の問題点も浮かび上がらせているようにも思える。本書全体に関わることで言えば、『カクテル・パーティ』論および「ギンネム屋敷」論で採用されたこの視点は、どうして第一章、第二章では採用されなかったか、という具体的な問いが生じる。つまりこういうことだ。「女性」に対する加害主体を生み出す悲惨な状況が占領体制下の構造から生み出されるというのなら、大田洋子を周縁化した中央文壇の男性批評家たちもまた、この構造の犠牲者だということになり得てしまう。日本の中央文壇の男性批評家たちには、大田を読み損ねざるを得なかった被害者性がある、という言い方が可能にもなってしまう。大田を周縁化した批評家批判を前提として作品を読み換えた結果は、「ギンネム屋敷」論や『カクテル・パーティ』論の枠組を有効とするなら無効になってしまわないのか。大田作品を中央文壇の男性批評家たちが読み損ねたことの問題もまた、重層的に読まれるべきであったかもしれない。

4. おわりに

以上の検証を踏まえて、あらためて本書における「読むこと」について述べる。終章において、「読むこと」の意義は次のように示される。「破壊的な出来事」の「体験を持たないことが一つの傷となって、残響を感じ取っている読者を苛む」(275頁)、その苛みによる「傷」を介した「記憶の分有は当事者／非当事者の分断を越えて課せられる問題」(277頁)である。その問題に向き合うことを要請する「作品」を読み、そこに「自分のものではない体験を受け渡され」、「読者としての私たち自身が当事者性を獲得していく可能性」を開く。正論である。だが、ここで述べられている「当事者性」が「読者」のそれなら、それはまだ、若松氏の言う「孤独」な主体を補完し、「噛みしめる」ように「被爆作家」の言葉を読む者の枠を出ていないようにも思う。というのは、「共振」、「分有」を小説にみる視角がいささか局限されており、また、批判的な読みが結果的にダブル・スタンダードを排除しないからである。さらに加えるなら、

本書では、「痛みの分有」という読み方の反証となる作品に触れていない。すなわち、「読者としての私たち自身が当事者性を獲得していく」ことの不可能性を突きつけ、その断層に直面させ、傷をつけにくる、そのような揺らぎを与える暴力性を帯びたテキストの検証がない、ということだ。そして私は、そこにこそ村上氏が導こうとした、「国家原理」あるいは「国家社会」への「抵抗」の契機があるとも思う者だ。最後に、本書において、そのような契機をもつ小説を取り上げたと思う、「第九章 原発小説を読み直す―井上光晴「西海原子力発電所」―」の結論部で村上氏が述べていることに触れておきたい。

出来事を語る時、語り手はすでに、他者の存在を抱え込んでいる。その意味で、語りを実践することは、死者の声を領有する危険と隣り合わせの試みなのだ。いかに語りを積み重ねていっても、語り尽くすことのできない沈黙の領域が残される。そのような沈黙に向き合いながら出来事の語りと聞き取りを實踐していくとき、贖被爆者と本当の当事者との間に体験の分有の契機が見出されるのかもしれない。

本書の重要な提言である「痛みの分有」について、私が「小説」を読むことで考えようとするとき、「贖被爆者」と「本当の当事者」との間に、「体験の分有」に関わるいかなるねじれた論理が介在するか、ということ言葉をしようと試みるだろう。真の「当事者」とは誰なのかを争い、むしろ「当事者」などいない、という議論にも短絡的に結びつく悲惨な現状を、構築主義的に〈正しい〉思考が導いてしまうこともある。そのことを肯わない態度からすれば、この真と贖とのあいだにある灰色の「当事者」による、いかがわしい連帯を成す可能性に開かれた「小説」に、「国家原理」や「国家社会」への「抵抗」の機縁が成されることを読みたいと思うからである。

(ASANO URARA・亜細亜大学)